Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-01

Study of the effective family support program for the families of clients with psychiatric disorders using home visiting nurse service

Toyoshima, Yasuko

(Degree)
博士（保健学）

(Date of Degree)
2011-03-25

(Date of Publication)
2011-09-08

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲5140

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005140

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	豊島　泰子
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学　位　記　番　号	博い第 5140 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 23 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

Study of the effective family support program for the families of clients with psychiatric disorders using home visiting nurse service(精神疾患で訪問看護を利用している利用者の家族への訪問看護師の効果的な家族支援のプログラムに関する研究)

審　査　委　員

主　査　　教　授　松田　宣子
　　教　授　川口　優子
　　教　授　橋本　健志

論文内容の要旨

専攻領域　看護学

専攻分野　在宅看護学

氏　　名　豊島　泰子

論文題目（外国語の場合は，その和訳を（　）を付して併記すること。）

Study of the effective family support program for the families of clients with psychiatric disorders using home visiting nurse service
（精神疾患で訪問看護を利用している利用者の家族への訪問看護師の効果的な家族支援のプログラムに関する研究）

論文内容の要旨（1,000字～2,000字でまとめること。）

【目的】

精神疾患を有し訪問看護を利用している利用者の家族は，主に介護を担っている場合が多く，家族は多くの問題を抱えている。そのため家族への支援が重要となるが，家族に対する具体的支援方法については私の知る限りでは明らかではない。本来家族は，自らセルフケア能力を持ち，日常生活を営む行動の中で，自らのセルフケア行動を評価，修正し円環的なプロセスを経てセルフケア行動をとっている。その家族に対して，訪問看護師が円環的プロセスの家族セルフケアに基づいたFモデルという家族支援モデルを作成することで，経験の浅い訪問看護師が効果的な看護を提供することができるのではないかと考えた。

そこで本研究は，精神疾患を有し訪問看護を利用している要介護者の家族に対し，訪問看護師が円環的プロセスの家族セルフケアに基づいたFモデルの有効性を検証することを目的とした。

【方法】

研究デザインは，Fモデルによる介入検証研究とした。検証方法は，訪問看護師がFモデルを使用し介入前後評価を行った。評価は，以下の4点であった。1.利用者のセルフケアが上がったか，2.家族アセスメント，3.そのアセスメントに基づいた家族支援，4.家族の介護負担であった。

対象者は，福岡県および関西圏の訪問看護ステーションの訪問看護を利用している利用者の主介護者18名と精神科訪問看護を実践している訪問看護師の中で研究参加の同意が得られた17名とした。

データの収集は，訪問看護師にFモデルによる家族支援の前に，(1)利用者の現在のセルフケア，(2)家族のセルフケア能力についての評価をお願いした。また家族アセスメントを行い，家族のセルフケアレベルを見極め，必要時に看護介入をお願いした。また担当訪問看護師から家族に対して，荒井らによって作成されたZarit介護負担尺度，日本語版(J-ZBI)を用い作成した調査票の配布と調査票を記述後，返送用の封のできる封筒を渡してもらった。家族支援モデルによる家族支援から3～6ヶ月後，訪問看護師に介入前と同様の評価をお願いした。家族支援モデルを用いて看護介入を行った訪問看護師に(1)家族のセルフケアレベルが上がったかどうか，(2)看護師が行う家族のアセスメントが介入前・後でどう変わったか，(3)Fモデルの使いやすさ，等について半構成法による面接調査を行った。

分析は，訪問看護師が介入前後に評価した評価点について，平均値を対応のあるWilcoxonの順位和検定を用い分析した。また，(3)家族アセスメントに基づく家族支援については，半構成法による面接調査を行い，Grounded Theory Approach法による質的分析を行った。なお，本研究は神戸大学医学倫理委員会の承認を得て行った。

【結果と考察】

分析の結果，利用者のセルフケアの評価は，いずれの項目に関しても高い傾向があったが，有意な差までは認めなかった。家族アセスメントの評価は，「家族は，利用者の精神症状が出た場合の対処法が取れるか」と「介護以外に自分の時間を確保することができるか」の2項目では，介入後にそれぞれ有意に低かった。利用者のセルフケアの評価がいずれの項目も高かったのは，訪問看護師の介入の効果があると考えられた。一方，家族アセスメントの評価が低かったのは，精神疾患を有している要介護者の家族は，家族のセルフケア能力を上げることが難しいのではないかと考えられた。家族の介護負担は，有意な差までは認められなかったが介護負担は低かった。「家族は利用者が必要以上に世話を求めてくること」に有意に介護負担を感じ，「利用者の介護についてはうまくなりたい」とは思っていなかった。このことは，家族は利用者の介護負担を感じながらも介護する上での困りごと等は，訪問看護師に聞きながら介護することで介護負担は低く，それは介入効果であることが考えられた。

訪問看護師の6割は，家族のセルフケアレベルが高くなったと捉えた。だが，セルフケア能力を高める難しさもあった。セルフケアレベルが上がらなかった理由として，家族自身がセルフケア能力を高めようとする認識がなく，家族内で起こった問題を解決しようと努力しようとしていないこともわかった。

以上のことから家族のアセスメントについては，訪問看護師は家族を観る視点が広がるという点で有効であるが，家族支援については，家族自身がセルフケア能力を高めようとしないなど，家族の無気力感が大きく影響しているなど個別的な状況があるためFモデルの支援方法については多角的なパターンの検討が必要だと考えられた。

指導教員氏名：松田　宣子

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	豊島　泰子		
論文題目	Study of the effective family support program for the families of clients with psychiatric disorders using home visiting nurse service 精神疾患で訪問看護を利用している利用者の家族への訪問看護師の効果的な家族支援のプログラムに関する研究		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	教授	松田　宣子
	副　査	甲南女子大学教授	川口　優子
	副　査	教授	橋本　健志
	副　査		印

要　旨

本研究の目的は、精神疾患を有し訪問看護を利用している要介護者の家族に対し、訪問看護師が円環的プロセスの家族セルフケアに基づいて筆者が試案した家族支援モデル（以下Ｆモデルとする）の有効性を検証することである。

研究デザインは、Ｆモデルの介入検証研究である。研究対象者は、Ａ県およびＢ県にある訪問看護ステーションを利用している主介護者 18 名と精神科訪問看護を実践している看護師の中で研究参加の同意が得られた 17 名であった。検証方法は、訪問看護師がＦモデルを用いて介入し、利用者および家族のセルフケアの変化、Ｆモデルのアセスメントの有用性などを、構成的調査票を用いての量的評価および半構成的面接による質的評価で行った。また、介入した家族には、介護負担度の変化を、構成的質問紙を用いて調査した。分析方法は、量的データは統計ソフト SPSS.V.19 を用いて統計的に分析を行った。訪問看護師の介入前後の量的評価および家族の介護負担感には、評価点に平均値を、対応のある Wilcoxon の順位和検定を用いて行った。また、訪問看護師に行った半構成的面接は逐語録に起こし、グランデッドセオリーによる質的分析を行った。なお、本研究は神戸大学医学倫理委員会の承認を得て行った。

結果として、Ｆモデルの介入後の量的評価で利用者のセルフケアの変化として、いずれの項目も高い傾向があるものの有意な差は、2 項目のみでしか見られなかった。質的評価では、訪問看護師の 6 割は、家族のセルフケアレベルが高くなったと捉えていた。しかし、同時に精神疾患を有し、家族自身がセルフケア能力を高めようとする認識がなく、家族内で起こった問題の解決に努力しようとしていないなど家族自身の困難さを述べていた。介護負担感については、家族の困りごとへの対応など 2 項目で介護負担感が低くなっており、軽減できていたが、他の項目は有意な差までなかった。以上の結果からＦモデルの介入の有効性は、質的データからは得られたが量的評価として一部分にのみの有効性であった。今回Ｆモデルを用いることにより、訪問看護師にとっては家族を観る視点が広がり、支援方法の充実につながりそうであるという意見が述べられた。

考察として、地域で精神疾患を持ち生活する当事者を支えるには、家族の力量が重要であり、その家族を支えるのが訪問看護師である。今回のＦモデルは、家族のセルフケアを一部高める傾向にはあったものもの十分な結果は得られなかった。その理由として家族自身がセルフケア能力を高めようとしないなど、家族自身の無気力感、あきらめ感が大きく影響しているなどの個別的状況が認められた。今後事例を多く重ね、家族の状況を分析し、Ｆモデルの構造について検討を重ね、看護介入し、検証を行い、より有効なものとして構築していく必要がある。

以上の審査結果から在宅看護学として価値ある業績として認め、学位申請者豊島泰子氏は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

掲載論文名・著者名・掲載（予定）誌名・巻（号），頁，発行（予定）年を記入してください。

Study of the effective family support program for the families of clients with psychiatric disorders using home visiting nurse service・Yasuko Toyoshima, Nobuko Matsuda・Bulletin of Health Sciences Kobe・26, 平成23年3発行予定